

---

# 背を向けて！

kabadei

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

背を向けて！

### 【Nコード】

N4048X

### 【作者名】

k a b a d e i

### 【あらすじ】

環境問題が深刻化し、絶滅の危機へ達した人類。

彼らは禁忌であるクローン技術へと手を伸ばし、ある成功へとたどり着く。

研究の結果により生み出された子供達は超能力に似た力を持ち、日本に建設された専用の教育機関で生活を送る事になる。

その中の一人、『神の足』の異名を持つ少年。

彼は、今日も背後からの闇討ちや不意打ちを避け、どんなことから

も逃げ切る。  
そう、どこまでも。

## いつもの風景（前書き）

基本的に長文&不定期更新になるかと思えます。  
暇なときにこそ読んでもらえるとう幸いです。

## いつもの風景

彼は、速かった。

誰よりも早く、そして速い。

人でも動物でも風でも重力でさえも、彼の前では障子ほどの障害ともならない。

そして、彼は今日も走り続ける。

ありとあらゆることから背を向け、どこでも

「ちつくしょう！うわっ！？」

グラウンドを疾走し続ける俺の足元に、急に青く光る円が浮かび上がる。

今の俺の速度は亜音速ほどのはずなのだが、その円、否、魔方陣は、高速に慣れた俺の目でさえも速いと思わせるほどの速度で土の地面に文様を描く。

その意味をコンマ一秒に満たない、一瞬でさえも霞む速度でざつと解析して、すぐさま俺は前に向けて低く跳躍する。

走り幅跳びの要領の、体を“く”の字に曲げた空中での前進だ。

俺が跳んでその場から離れるや否や、魔方陣の輝きが眩いものとなり、それと同時に、

「間に合え！・・・水円柱！」  
ネオ・スプリングラー

遠くから男の声が響き、それに呼応するかのようには魔方陣が爆発とさえ思える膨張を開始。

軽く6〜7メートルは跳んで着地した俺の踵寸前までそれは広がりに、内心やべえと冷や汗を掻いた時、魔方陣から凄まじい勢いで水柱が噴出する。幅は7メートルを下らないだろう、あんなのに巻き込まれたらどうなるか、考えたくもない。

そう思つて（絶対に当たらねえ）ともう一度内心で頷いた俺だったが、

「行かせねえよ『神の足』！」

目の前から、俺ほどではないが十二分に常人を駕する速度で走ってきた背丈の小さい男が、その速度のまま軽く地面を蹴り、つかの間空中に浮かぶ。

何をしてくるか、いやなよかん経験で何となく察知した俺は疾走する身を低くする。

予想通り、彼は身を捻る。

見てみれば、彼の足の少し前に、結構な量の魔力が練り込められた黒い球体が渦巻いていた。

捻った身を慣性に任せ、彼は足を振りぬぎ、魔力の球体を蹴りぬく。

「いい加減当たれ！パワー・ストライク！」

「嫌だよ！つーか死ぬよ!？」

蹴られ、普通のボールのように凹む魔力球。

そこから魔力光を発しながら、レーザーのような黒い光線が押し出されるようにして出てくる。

その数、60・・・ああもう数えられん！

爆発するかのように放たれた魔力光線は、正確に俺の走る道、ひいては俺の逃げ道までに突き刺さる。

今までも一番多い数だ。彼も俺が当たると思ったのだろう、「っしやあ！」とガッツポーズまで決めている。

しかし、

「こんなの、当たったら病院じゃすまんわ・・・!!」

視界を覆い尽くすように次々に降り注ぐ光線を前に、俺は横でも後ろでもない。

前に逃げた。

俺は足に魔力を集中させ、刻み込まれた記憶けいけんの中から、この状況を打破するためのものを選ぶ。

今回は右も左も上も下・・・は流石にないが、どこもかしこも即死級の光線が今もなお落下している。

日常風景だ。

だから、俺はいつも使っているものを選ぶ。

「行くぞ！強歩！」  
ハート・ステップ

練りこんだ魔力が意味を成し、強化を足に刻むのを確認すると、俺は一気に加速する。

胸を抉るように一本来た。身を捻って回避。

次は腕、足、胴体。

面倒なので右斜め前に跳躍。

下を見れば、当然のように足元に光線が来る。

体を倒し、軌道を変えて避ける。

しかしその先にも光線が。

見つけた、微かな足場を踏み、光線を縫うようにして跳ぶ。

抜けた。

「何・・・!?」

「ダメだ！今回も逃げ切られるぞ！誰か止める！」

一瞬で5メートルほどを跳んだ男に目掛け、数人の男女が杖や指を急ぎ振り回し、その先から熱線や光の槍などを飛ばす。

しかし彼は空中で身を丸め、回転したかと思うと、“宙”を蹴った。

啞然とする見物人を余所に、彼は後ろの光たちを無視して、髪を逆立てながら手で着地する。

そこから体操選手のように何度も前に向かって回転し、追尾式の魔法も、大半が地面に不時着してしまう。

残ったものも、また走り始めた彼が、

「強走！」  
ラビレット

と叫ぶと、全て一瞬のうちに置いていかれてしまった。そして彼が、『ゴール』と書かれた鳥居のような枠をくぐると、見物人からは歓声が、参加していた物からはため息と無念の叫びが。

「っはあ．．っはあ．．．こ、今回もどうにかなった．．」

ゴールと同時に倒れこみ、肩で息をする中肉中背の少年。

彼は在学生の全員、計451名の能力者の上、校内順位ランキング10位以内に位置する強豪。

能力名は『不足脚』、二つ名は『神の足』を持つ。

彼の生きるこの時代、2045年。

人類は窮地へと立たされていた。

環境問題により増大する被害と、それも伴い深刻化が進む少子化。どの国の科学者や理論家がどんなに楽観的に現状を見ても、滅ぶのは10年もないとされた。

各国の主脳達は会議を繰り返し、倫理を無視した繁殖目的の法律を提案したり、却下したり、そんな繰り返して時間を浪費していった。

しかし事態は恐ろしい速さで深刻化を続け、必死の二文字に憑かれ、ある結論に至る。

『強い人間への昇華』。

つまりそれは、人体実験などの禁忌と銘打たれる行動の実行を意味していた。

なりふり構ってはいられない状況だったとはいえ、しかしモラルの反対は当然の如く発生し、何とか現存する人間への被害は避けられないか。検討を続け、禁忌のうちの一つが紐解かれた。

クローン技術である。

財政も捨て、政治も捨て、戦争も捨て、全てを捨て。

より強い肉体を、どんな環境でも生きられる生命力を。

より高い知恵を、どんな状況も切り抜けられる叡智を。

求め続け、そして一つの結果を出す事に成功する。

それは、『知識をそのままに、新しい生命へと受け継がせる』というものだった。

記憶は遺伝しない。が、その結果は余りにも衝撃的で、かつ魅力的だった。

研究に狂気も入り混じり、猛烈と言つていい速度で進歩を遂げたこの技術は、『細胞間でも受け継ぎができる』というところまで発展した。

無論それにも限度はあるが、ありとあらゆる受精卵で、ありとあらゆる知識のパターンを埋め込み、成功したわずかな完成体を成長させる。

だが、体外培養によって生まれた赤ん坊は、目を覚ますと同時に泣き喚き、聞くも無残な悲鳴を上げてその幼い命を落としていった。

「何故だ」

「我々の研究は完全なはずだ」

そんな声が飛び交い、この数年にわたる研究は無駄だったのか。

これ以上の進歩は不可能なのか。そんな声まで上がった。

だが、そこに救いか、はたまた悪魔の手が差し伸べられた。

科学と対極を成す存在、

オカルト野郎  
イカレタ奴ら。

彼らの非現実的にして非科学的な発案は科学者との激しい口論を生んだが、お互いにそんなことをしている場合ではないと手を取り合う。

そして知識の部分に哲学や、精神論、人のあり方。神の存在。

そのようなものを追加し、第二の出産が行われた。

するとどうだろう、目を開けた赤ん坊は最初は驚いたかのように息を止め、目を見開いたが、すぐに正常な赤ん坊としての泣き声を

上げ始めた。

協力者達は躍り上がった喜び、すぐさま結果を報告する。

主脳達から民間へと流れたその知らせは人々に希望をもたらしした。

だが、ここでも問題、もしかすると嬉しい誤算が発見される。

ある一定の年齢まで成長し、人格も形成されてきた子供達は不思議な力を持ち、それを体内で操って特定のイメージを持つことで、いわゆる魔法まじきを起こす事がわかったのだ。

ある子は手から小さな炎を出し、ある子は物体を浮遊させた。

彼らは成長と共にその力を増し、故意ではないが人的被害も増えた。

だからというわけでもないが、研究の主力であり立地も環境も丁度いい日本に、専用の教育機関を設けることが決定したのだ。

その学園が建設され、経営されてから10年。

卒業した者達が教師として指導をし、そのローテーションを組んでしばらく。

いくつかのもの、それこそ一人一つと言っているいい能力の中で、一風変わった力を持つ少年がいた。

その名は、風浦かぜうら 草路そうじ。

成績普通、授業態度良好、友人関係異常、戦闘能力0、逃走率95%を誇る。

彼は今日も、全てのものから背を向け、真っ直ぐに逃げる。

どこまでも。

## いつもの風景（後書き）

いかがでしたでしょうか？

少しでも楽しんでいただけたらそれ以上に嬉しい事はないです。

さて、読んでいて「はあ？」とか「なんじゃこりゃあ！」と思った不満や疑問をどうぞ遠慮なくぶつけてください。

感想でもレビューでもなんでもいいです。

それが私の力になり、（・・・マゾ的な意味じゃないですよ？多分）これからの参考以上のものとなると思います。

ですので、そこら辺のことを、どうぞ宜しくお願いします。

## 春、入学。

桜と初々しい恋が散る季節。  
春。

僕は、特立新世界学園、通称“特新”と呼ばれる学園に入学する。

封筒に入っていた地図と照らし合わせ、念のため切り抜いてきた写真も見て確認する。

うん、あつてる。大丈夫だ。

今日は噂に聞く入学式の日らしいのだが、遅めに来たせいかな広い門を通して見回しても、学生どころか人っこひとりいない。

閑散とした雰囲気緊張も覚えるが、かえってこっちの方が気が楽だと思ひ直す。

しかしいつまでも突っ立っているわけにもいかない。

ともすれば震え出しそうな足を抑え、馴れない堅い制服に身を包んで、僕は新たな生活への第一歩を

踏み出そうとしたら横を何かが走り抜け、視線を向ける前に大気から弾け飛ばされた突風で宙を舞った。

「・・・なっ!？」

あまりの事態に判断が追い付かず、地面を見上げていることにも気づかないで声を上げる。

何だ何だ!?

というか今のは何!?

体を浮遊感が襲い、竦み上がるような焦りを飲む。

だが、

(・・・これくらいなら、毎朝の狩りで慣れてる!)

空中で好き勝手に踊る四肢を引き寄せ、手で足を抱えるようにして、抱く。

そのまま身を前に傾けると、耳を無駄に涼しくする風を感じ、そして回る。

回る、回る。

そして地面が近づいてきたので腕を解き、伸ばして着く。

硬いアスファルトの感触を握りながら力を込め、それを起点にしてまた、跳ぶ。

数回を回転で刻んだ後、しっかりと着地して前を素早く見据える。

先程のが余程高速で進んでいたのか、幅5メートルは下らない通学路の両端に立つ桜の木から大量の桃色が舞っている。

だが、他には先刻と変わらない、閑散とした空間が広がっているだけだ。

ならば、と僕は“目”を捨てた。

耳に入る風。

木が擦れる音、小さな虫や動物の熱。

そこに、押し殺してはいるが隠しきれないほんのわずかな鼓動を感じ、

「・・・っ!」

落ちていた石を投じた。

がさつという、枝と草を掻き分ける音が響き、同時に影が飛び出した。

目を開けて確認するが、

(・・・速い!?)

何かが茂みから出てきたのは見えたが、一瞬で横の通学路に飛び出してきた、その回避の“終わり”しか知覚できなかった。

そんな尋常とは思えない動きをした影は、驚いたことに、人間の形をしていた。

中肉中背、低くはないが高くもない背丈に、細い目が目立つ別段イケメンでも何でもないごく普通の人混みに紛れるときには便利だなあとしみじみと思うような顔だ。

ハイボンと名付けよう。

「おい待て！吹っ飛ばしたのは悪かったがやけに酷評されてないか!?!」

おや、ハイボンが叫んでいる。

「何か変なあだ名まで既につけられてる気がするんだが!?!」  
意外とハイボンは察しがつく方らしい。

うんうんと頷いていると、また音が聞こえてきた。

今度は降ってくるような肉を火で炙る時のような燃烧音。初めて聞く。

はてと思うと、ハイボンが顔を引き吊らせて高速のターンをする。

するとその1秒後ほどで、ハイボンの足元に矢が突き刺さった。

いや、違う。

矢ではあるが、僕は爆炎を素材にした矢なんて知らない。

しかもそれは膨張し、弾ける。

「やべっ!」

しかしハイボンは驚異的な速度で右へと身を飛ばす。

結果、火の矢は誰にも当たることなく爆散した。

いよいよ混乱が極まってきた僕だが、ハイボンは更に顔を歪ませると、

「おい！お前、何年何組だ？」

「へっ？」

突然の疑問に驚くが、送られてきた手紙を思い出すと、

「ええと、まだ決まってるじゃないそうです！ただ2年生としか！」

「転校生か。それなら後で謝るから、それまで待っていてくれ！」と、そう叫び返すと、彼は身を翻し、

「じゃあな！」

学園の方へ走って行ってしまった。

・・地面を蹴ったところまでした見えなかったが。

「あーもう、また逃がした！これで何回目かしら・・・」

気ままに呆然としてっていると、そんな声と共に、スーツ姿の女性が走ってきた。

振り返ると、女性でありながら高い身長、大きいがきりつとした目が美しさというよりは爽やかさを感じさせる顔立ちをしていた。

彼女は僕の隣までくると、何故か煙が上がっている手を振りながらため息をつき、

「あのヤロ、HRで会ったら覚えてなさい・・・」

といささか人格を計りかねる発言をした後、ふと気がついたかのようになら振り向く。

首を傾げ、

「？ えーっと、見ない顔ね。もしかして、今日くるっていう新入生くん？」

若い年上の女性から話しかけられたことはないのです、少しどきまぎしながらも、

「あ、はい」

と答えた。

それを聞いた(多分)先生が、笑顔になって手を合わせて、  
「あーよかった。いつ来るかわかんなかったから、探す手間が省けたわ」

「は、はあ・・・」

気の抜けた生返事しかできず、少し反省する。

しかし先生はそんな僕を気にする風もなく、先ほどハイボンが隠れていた茂みに近寄り、何かを探す。

「ところでさー」

と前置きしてから、先生は手に石を持ってこちらに見えるようにして掲げる。

「これ投げたのって、君？」

「あ、はい。・・・ってああ！すみません、ついいつもの癖で！」

「違う違う、別に投石を責めたわけじゃないわよ」

苦笑しながら言われ、ほっと胸を撫で下ろす。

先生は何が楽しいのか、指に挟んだ石をしげしげと見つめる。

「ふーん・・・。これは、楽しみな子が入ってきたわねえ」

「は？」

意味が分からず、思わず間抜けな返事をしてしまう。

「あー、いいのいいの、気にしないで」

そう言われたら黙るしかない。

「さて、随分と型外れな感じだけど・・・。とりあえずは君、」

「入学、おめでとう」

## 転入、でも一騒ぎ

先生に連れられ、しばし無人の通学路を歩く。

しかし、見れば見るほど、大きい学校だ。

元々、実家より大きな建物をあまり見たことはなかったが、それでもこの校舎の巨大さはしつかりと分かる。

見あげれば、てっぺんにある時計が辛うじて確認できる。

横を見れば、どこまで続いているのかは、統一された壁の色彩のせいもあり、ぱつと見ただけでは把握できない。

(これから、ここで生活するんだ・・・)

そう思うと、身が引き締まるような、腹の底が冷えるような緊張感に襲われる。

そうしているうちに、玄関が見えてきた。

「わぁ・・・」

入ると、思わず感嘆の息をもらす。

数十メートルほどの横幅に、大量の下駄箱。

正直ここまで数が必要なのかと思わなくもないが、そうゆうものなんだろう。

そう納得していると、前を歩く先生が首をかしげ、

「毎回思うけど、この下駄箱って、無駄よねえ・・・」

・・・そうゆうものなんだろう、うん！

自分でもよくわからない勢いで無理に頷きつつ、先生に促されるまま『2-K』というプレートが付いている下駄箱に靴を入れる。

腰から下げていたポーチから新品の上履きを取り出し、履く。

「ぬ・・・」

・・・なんだろう、このフィットしているようでキツイような動きや

すいようなくいような。

片足を上げ、感触を確かめるようにして足首を回す。うっん、とつかの間唸る。そうしていると、視界の端を制服を着た人影が通り過ぎていく。少し目を凝らしてみると、緑の腕章を付けていた。

何だろうな、と思ったが今はこの上履きだ。

(一言で表すと慣れないなあ・・・)

まあ、それもこれからどうにかなるのだろう。

そう思っつて、微妙に苦笑して僕を待っている先生の方へ歩いていった。

本当にこの学校は、どこまで広いんだろうか。

先ほど階段を3階分上り、教室が並ぶ廊下に出たのだが。

建物の中なのに、どうして壁が見えないんだろう・・・。

呆れとも驚愕ともつかぬ感じで渋い顔になっていると、先生が『2

- K』と書かれたプレートがドアの上の方に付いている教室の前で止まり、

「ん、じゃあちよつと待っててね。紹介するときになったら呼ぶか

ら

「は・・・はい」

自分でも緊張で震えた声だと思っつてしまった。

わずかに頬が赤くなつていているのも分かる。

そんな僕を安心させるように、先生は爽やかに笑つて、

「大丈夫よ！このクラスの連中は基本的に頭おかしい奴らばっかだけど、楽しいわよ？」

そう言われ、

「はい！」

今度は元気に返すことができた。

よしっ、と先生が笑顔で頷いて、ガラツとドアを引いて教室に入っていた。

先生がドアを抜けて教卓に上がると、わいわい騒いでいた音が静まる。

『よし、おはよー。じゃあ皆いるわね？』

『沙那雪先生、クサミチがまだ来てません。正確に言うと先生に火槍飛ばされて窓から逃げて行ってから戻ってきてません』

『あんにやる、まだどっかで隠れてんのね……。じゃあ正富、何か報告受けてる？』

『えー、「聖域で待機なう」だそうです』

『要はいつもの腹痛ね。まあそれならいいわ』

内容からして微妙な会話だが、いつものことらしく、教室は静かなままだ。

先生の声がよく通る。

『今日はビッグニュースがあるわ』

『なんだと？ ざわ・・・』

『興味深いな。ざわ・・・』

『あんた達口で効果音入れないの。さてまあ、面倒だから単刀直入に言うわね。・・・転入生よ』

おおおー！！

今までの静寂さはどこにいったのか、沸き上がったかのように話し声と歓声が起こる。

『男か！野郎か！？だったら興味ないぞ！？どんな奴だ一体！』

『おお同志よ！素晴らしく言動が矛盾しているぞ！落ち着けなさいつて！』

『慎太郎とか佐助に続く戦闘系だといいいね。クサミチとか“道士”みたいな人多いからさ。このクラス』

『落ち着きなさいあんたら。．．ま、期待していいと思うわよ？ちなみに男ね？』

一瞬で男勢の会話が止まった。

教壇の先生が額に手を当て、

『ただ素直なのよあんたら．．。まあいいわ。入ってきてー？』

呼ばれ、一度ゆっくりと深呼吸をする。

大丈夫だ。何度も練習してイメージトレーニングまでしたじゃないか。さっきの会話は想定できなかったけど。

(うん、．．大丈夫)

内心で確認をとって、現実で頷いてからドアに手を掛けた。

教室に足を踏み入れると同時に、ざっ！

大量の視線が僕を射ぬいた。

思わず身がすくむ。視線の中には、品定めするようなもの、体の動きを一つ一つ追うようなものがあり、それらが混ざり合って不可視の威力を生む。

でも、そんなのに怯えているようではダメだ。

キッと前を向き、手招きをしている先生のところまで進む。

先生の隣までくると、先生が生徒たちに向かって控えめに声を張る。

「はいはい、そんなにがつつり見ない。気になるのはわかるけどね？」

だが、視線が軽くなった気配はない。

先生が苦笑して、チョークを僕に手渡す。

「じゃ、これで黒板に名前書いてね？後は自己紹介お願い」

「はい」

先生が少し動いて、黒板の真ん中のスペースを開けてくれる。会釈をしながらチョークを黒板に立てる。

カツカツカッ

チョークが黒板で削れ、白い軌跡を残す音が、静まった教室に響く。

「・・・ぬ？」

書きにくいな、これ。

ここを、こんな感じに引いて、上げて、はねて・・・ああっ、もう。消して消して。

今度はこう、サツと伸ばしてタツタツて払って。

よし、次はこう、ダダダツてやってシュババーっと・・・ぬお、ミスった。

消して消して。

40分ほど経った頃だろうか。

黒板には 木 仙 と物凄い達筆で書かれた文字があった。

先ほどとは別の意味で静まり返る教室の中、汗を額に浮かべた少年

が満面の笑みで振り返り、

「木仙もくせんです！どうぞよろしく！」

「「「長いよ！」「」「」

総ツツコミを受けた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4048x/>

---

背を向けて！

2011年11月3日03時06分発行